

2025.4



©北里大学図書館（教養図書分館）
撮影：佐伯理来 海洋生命科学部海洋生命科学科4年

北里大学教養図書館と閲覧ニュース

平 井 清 子

2025年12月に相模原キャンパスにおいて、北里大学の新図書館が開館予定です。これに伴い、2025年秋ごろには現在の教養図書館は閉館の予定です。これを機会に、この教養図書館発行の閲覧ニュースも最終号となりました。1973年に第1号が始まり2025年4月の第136号で幕を閉じます。刊行頻度を変えつつ、この間、52年間継続されたことになります。本号は最終号として7人の執筆者の方々にエッセイを寄稿していただきました。どうぞ半世紀におよぶ時を一緒に巡り、楽しんで読んでいただければ幸いです。

北里大学教養図書館にはこの50年間に約14万5千冊の蔵書が収められました。2年生からはそれぞれの専門教育へ移る学生にとって、1年次の教養教育は大学でこそ得られるものという教職員の強い思いから集められた貴重なコレクションです。そして新図書館はアクティブ・ラーニング・スペースを備え、将来的な資料電子化を見据えた新しい形の図書館ですので、蔵書数は減らし、このうちの約7万冊が移管されることになりました。残った約7万5千冊の蔵書はすでに除籍作業が終わり、現在は教養図書館の地下にあります。近く希望の団体に寄贈され、次に学内での譲渡の機会を経て、最後は再利用される予定です。デジタル時代とともに本や図書館の姿も変わっていくとはいえ、長年、教養図書館長として図書館に関わってきた者として、やはり遺憾の念を禁じえません。

一方、この教養図書館は1987年の北里学園創立25周年を記念してPPAより寄贈されたもので、1989年に竣工しました。学祖北里柴三郎博士が1915年に白金に開設した北里研究所本館のイメージを、教養図書館建設計画に携わった教職員の方々が継承したものです。この北里研究所は、1892年に福澤諭吉などの支援を受けて東京都港区芝公園内に開設された、日本初の私立伝染病研究所の流れを汲むものでした。北里研究所には北里柴三郎博士の感染症研究に対する魂が込められており、それが脈々とここまで続き、今もなお私たちのキャンパスに受け継がれているのです。

図書館の屋根には伝統あるオランダ製のカリヨンという鐘が取り付けられ、毎日3度その音を響かせています。カリヨンの鐘は安らぎと平和、そして自治の象徴とされてきました。2025年春から教養図書館の最後の年となりますが、どうぞ多くの方々に図書館にご来館いただき、北里の歴史を感じていただければ幸いです。

最後に、第1号から第136号においてご執筆いただいた教職員と学生の皆様に心より感謝申し上げます。

（教養図書分館運営委員）

本との出会い、学びの広がり

伊 藤 真 吾

私は図書館が好きだ。学生時代から現在に至るまで、図書館は私にとって特別な場所であり、日常の中に溶け込んでいる。

私の専門は数学である。大学時代から、数学の本を求めて図書館に足を運ぶことが多かった。数学の書籍は専門性が高く、購入するには高価なものも多いため、図書館の蔵書には大いに助けられた。研究に必要な資料を探し、静寂の中でページをめくる時間は、私にとって最も集中できるひとときである。大学院生の頃に購入し、勉強したいいくつかの本はボロボロになっているが、いまでも研究の際に見返すことがある。書き込みもたくさんあるが、これらの本は、私の学びの道標となり、今でも大切にしている。

振り返ってみると、私は数学以外の本をあまり読んでこなかった。小説やエッセイ、歴史書など、世の中には無数の書籍が存在するが、手に取るのは数学の本ばかりであった。文学や社会科学の本にも興味がないわけではないが、数学の本は1ページ読むのに何日も費やすことがあり、その世界に没頭すると、他の分野に目を向ける余裕がなくなってしまうのだ。しかし、年を重ねるにつれ、教養書の重要性に気づくようになってきた。哲学や歴史、科学の発展を知ること、より広い視点を持つことができるのではないかと思うようになった。最近ではそういった本にも手を伸ばすようになり、新たな知識を得る喜びを感じている。

町の図書館にもよく足を運ぶ。特に何かを借りるわけではなくても、あの雰囲気が好きなのだ。棚に並ぶ本の背表紙を眺め、静かに本を読む人々の気配を感じるだけで心が落ち着く。町の図書館は大学の専門図書館とは異なり、多様なジャンルの本が揃っている。その場にいるだけで、日常と

は異なる広がりを感じられる。この感覚が芽生えることを期待して、よく子供たちを連れて町の図書館に行く。本を手に取り、興味のあるものを自由に読める環境を大切にしてほしいと願っている。図書館の静かな空間の中で、子供たちが本と触れ合い、新しい知識を得る姿を見るのは、私にとっても楽しみの一つである。

図書館とは不思議な場所で、そこには知識が詰まっているだけでなく、時間の流れが異なるように感じることもある。ふとしたきっかけで手に取った本が、新たな視点を与えてくれることもある。たとえ私が数学の本ばかり読んできたとしても、図書館という空間に身を置くことで、未知の世界への扉が開かれているのだと感じる。図書館は私の日常に深く溶け込んでおり、これからも通い続けるだろう。時には普段読まないような本にも手を伸ばし、新たな発見を楽しみたい。

本学では、新図書館の建設に伴い、現在の教養図書館は閉館すると聞いている。過去には図書委員長を拝命したこともあり、教養図書館には特別な思い入れがある。建物の外観も趣があり、長年親しんできた場所がなくなることに寂しさを感じる。しかし、新しい図書館への期待も大きい。どのような設備が整い、どのような空間が生まれるのか、今から楽しみでならない。最新の技術を取り入れた閲覧スペースや、より充実した蔵書のラインナップが整うことで、学びの環境が一層向上することを願っている。私自身、これまで以上に図書館を活用し、新たな知識に触れる機会を増やしていきたい。また、北里大学の学生たちがこの新しい図書館をどのように活用し、どのように学びを深めていくのかを見守るのも楽しみの一つである。

(一般教育部長)

「白樺と私」

須 貝 昭 彦

実家の玄関脇に白樺の木が1本あり、父親はその木の横を通して、縁側の近くの物置から自転車を取り出して通勤していた。4～5歳頃、夏になると父はその白樺の木からゴマダラカミキリを何度も捕まえてきて、縁側で見送りをする私に渡してくれた。それが昆虫との出会いだったと思う。その後は、カイコを何千匹も飼ったり、モンシロチョウを卵から育てて部屋中にモンシロチョウが舞ったり、昆虫少年まっしぐらであった。そして昆虫への興味から「理科」という教科が好きになり、小学校の高学年でサイエンス系の本を読み漁る事になった。特に社会思想社の現代教養文庫の本は値段が手頃で沢山買い揃えた。その中でも『ポケットサイエンス』のⅠ～Ⅴは何度も読み返した。科学史に近い内容で、例えばガラスはどのように発見されたのかとか実に興味深い話のオンパレードであった。さらに『おもしろい物理学』は『続』、『続続』と3巻も買った。実家には『宇宙学入門』、『光合成の謎』、『恐竜の時代/古生物学入門』など同社の文庫本が今でもおいてある。残念ながら社会思想社は2002年に廃業となってしまった。その後、現代教養文庫の一部は電子書籍化されたが、サイエンス系に関しては電子書籍化されていない。現代教養文庫以外にも講談社文庫のファラデーの『ロウソクの科学』なども何度も読み返した本の1つである。ファラデーは、電磁気学や電気化学の分野での功績が知られているが、鯨油の熱分解物からベンゼンの単離もしている。中学生の時に背伸びをして岩波書店の『理化学辞典』を買いに新宿の紀伊國屋書店に行ったのであるが、内容が理解できずに同じ岩波書店の『科学の事典』を買ってきた苦い思い

出もある。でも、この事典は科学的知識満載で非常に良い本であった。

中学3年生の時に買った『学校理科薬品の利用と管理』が最終的に私の進路を「化学」に決める本となったと言っても過言ではない。この本には、中学・高校の理科準備室に常備されている化学試薬について、保管や取り扱い方法などの他にどのような実験に用いる事ができるのか、具体的に書かれていた。中でも戦時中の物資が無い時に、髪の毛を水酸化ナトリウム水溶液で加水分解し、塩酸で中和して醤油として使用したというトピックスは衝撃的であった。しかし、髪の毛の構成アミノ酸のシステインを考えると臭そうで、この実験は行わなかった。高校2年生の時に、化学の先生から化学実験クラブを立ち上げてくれと頼まれ、その時にこの本が大活躍したことは言うまでもない。

オパーリンの『生命の起源』も子供の頃に読んで感動したが、その後の研究で生命が誕生した頃の地球はオパーリンが考えていたような還元状態ではなく、酸化状態であった事が判明し、その内容は今では陳腐化してしまっている。誰も見た事がない「起源」というものは想像でしかないが、私の化学教員としての「起源」は、実家の1本の白樺の木であったと確信している。

(自然科学教育センター・化学単位)

文中の図書は教養図書分館で所蔵しています。
・ロウソクの科学 / ファラデー 著
請求記号 430.4/F15 配架場所: 文庫本(2F)
・科学の事典 第3版 / 岩波書店辞典編集部編
請求記号 403.3/I95a/3ed. 配架場所: 参考図書(1F)

「教養図書館と閲覧ニュース」

浜 崎 浩 子

美しい音を響かせる鐘をもつ教養図書館は、北里学園の創立25周年を記念して、PPAの寄贈により1989年に完成したそうです。この閲覧ニュースはその時に発行が始まったと私は思っていました。第1号が発行されたのは遡ること16年、1973年5月でした。当時は教養部図書館が発行していました。以来半世紀にわたって北里大学の1年生はこのニュースを見ながら教養図書館を利用し、教養・基礎教育を受けてきたことになります。今では、閲覧ニュースはすべてをオンラインで見ることができます。私が北里大学に着任する前の記事に興味を湧き、昔の閲覧ニュースに目を通してみました。すると、現在のように活字で本の紹介が掲載されるようになったのは、1975年発行の第12号からでした。第11号までは何と縦に手書きで、1枚に学級新聞のような体裁でお知らせや利用上の注意事項があります。とても味があり、学生を思う心や図書館の発展に尽力する情熱にあふれています。

1989年は1月8日に昭和から平成に元号が改められた年ですが、4月に第57号が発行されました。新しい図書館には時代に合わせてパソコンやプリンターを備えたコーナーやDVDやCDを利用できる機器が設置されたコーナーができたことが紹介されています。この頃は携帯電話が普及する前で、大学の図書館で自由に音楽や映画を鑑賞できたのは画期的であったと思います。この号のエッセイには、「新しい図書館の資料や情報、環境をおおいに利用して、それぞれの方法で自分のためにしっかりと学び、豊かな心と精神をもつ人へと成長して欲しい」、と

いうメッセージが込められています。

2007年には100号記念号が発行されました。この号にも、さまざまな視点から皆さんの知的好奇心を刺激して本の良さに気づいてもらう工夫があり、学生が足を運んで本を手に取りたくするような図書館づくりをめざす教職員の熱い思いがよく表れています。

ところで、私の父の部屋は本棚で囲まれていてたくさんの本とカメラがありました。小さかった私は、手に届くところにあった旅行書の『ブルーガイドシリーズ』やカメラ・写真専門誌の『アサヒカメラ』をひっぱり出しては見ていた記憶があります。父は、古い外国書の袋状になっているページをペーパーナイフで切って開きながら読んでいて、そんな本の独特な古い紙とインクのおいさを今でも懐かしく思い出します。そこはとても落ち着く場所でした。後に訪れた様々な大学の図書館、フランスの研究所の小さな図書室、家のそばの図書館でも妙に落ち着いたことを、その時の様子や心情のようなものと一緒に思い出します。また、図書館で読みたい本や子供の紙芝居を見つけて借りて帰るとき、探していた文献をコピーして持ち帰るとき、そんなときのちょっとした達成感と安堵も忘れられません。これは、1988年の第54号に手塚甫先生が書いておられる「忘れ難い図書館」であると思います。

気になる一冊を見つけて、好きなところで読んでみてはどうでしょう。

(自然科学教育センター・生物学単位)

私にとっての偉人になっていく

野 崎 あゆみ

みなさんは偉人にどんなイメージをお持ちでしょうか。私にとって、偉人とは偉大な発明や発見をした人というイメージだった。かつては偉人漫画などに影響されていたためだろうか、外国の偉人を思い浮かべることが多かったように思う。しかし、専門的な学問を学んでいく過程で自身の内面も少なからず変化していったからだろうか、今は、私が学んでいる獣医学の礎を築いた方々を偉人だと感じる。かつて想像していた偉人のイメージより、更にリアルに近い存在だと感じる。

世間一般から獣医師が偉人として見られる機会は少ない。それは獣医学だけではないかもしれないが、そのことに気が付いたのはこの『獣医学の狩人たち2 20世紀の獣医偉人列伝』を読み進めて少ししてからだった。本書は、医学に比較し獣医学の基礎を築いた先駆者たちの名前がわずかしかなかったことを憂い、大竹修先生により執筆された。この本の目次を見ただけでも、今の獣医学の常識が実に多くの先達者が発見していったことだったのだと思い知り、その常識の数だけ日の目を見ず埋もれている方々がいるのだと実感する。今の獣医学の常識を見つけた獣医師の先達者の方々が、当時の状況を踏まえてどう生きていたのか、数々の知見をどう発見していくことになったのかが詳細に記述されている。

北里大学の、特に畜産学部（現獣医学部）の設立に関して、外すことのできない人物がいる。椿精一先生である。椿先生は母校の麻布大学をはじめ、北里研究所にも縁の深い方で、十和田市への畜産学部開設を実現させた功労者で

ある。詳細は割愛させていただくが、ぜひ本書を読み、椿先生の人柄や功績、さらに今の獣医学部がどのような経緯で設立されたのかを知ってほしい。そうすれば、より広い視野から北里大学で学ぶ意義を捉える一助になると信じている。

ところで、相模原キャンパスにはL1号館の前に建っている北里柴三郎博士像を筆頭に多くの銅像が建っているが、十和田キャンパスにも多くの銅像が建っている。毎日ほとんどの学生が行き来する学内の大通りに面する植木の傍に椿精一先生の銅像は建っている。椿先生の像は前方の池や松の木に遮られて、その存在を認知されることが少ないようで、私も本書を読んで銅像の存在を認知した。実は十和田キャンパスにも北里柴三郎博士の銅像は建っているが屋内に設置されており、椿精一先生の銅像だけ野外に設置されている。それが何故なのかとふと疑問に思ったが、おそらく「北里大学にその人ありといわれた椿精一博士」だからだろうと考えている。

本書に掲載されている評伝は『動物臨床医学』に連載されたもののため、J-STAGEで一部読むことができる。第1巻も第2巻も、目次に数多くの獣医学の偉人が名を連ねているので、みなさんも専門分野を学んでいる過程でたまに目次を見て興味が出てきたら、ぜひ読んでみてほしい。

（獣医学部獣医学科4年）

文中の図書は教養図書分館で所蔵しています。
・獣医学の狩人たち2：20世紀の獣医偉人列伝 / 大竹修著
請求記号 649.02||O82||2 配架場所：単行本(BF)

教養図書館、知の外部装置

高 藤 祐 宇

本学は、教養分野における必要単位数がとても多い。獣医学部獣医学科では、人文学の領域だけで6単位が必要だ。この単位制度には、卒業後に学生らが進んだそれぞれの分野にてリーダーとして力を発揮してほしいという願いが込められている。実際、臨床獣医師として業界をリードしている卒業生の先輩方の活躍を入学前からよく耳にしていた。しかし、ここで一つの疑問が浮かんできた。リーダーとしての立ち振る舞い方とは。そしてリーダーとして人から認められるためには。その答えは戦乱のイタリアを生きた人物が知っていた。今回はマキャベリの『君主論』について紹介する。

「人はただ結果だけでみてしまう」「加害行為は、一気にやっつけてしまわなくてはならない」「愛されるより恐れられる方が、はるかに安全である」

これらの言葉は、すべてこの書からの引用である。マキャベリの真骨頂は、人間が持つ獣性を否定することなく、むしろ理解し、利用しようとしたことにある。そもそも人類は冷静に客観的に社会を構築するために、法律や倫理によってその身を縛ってきた。しかし、どうしても身勝手な遺伝子がそのくびきから逃れようと私たちに命令する。自分一人の我欲我執と戦うことは大変なことである。そしてリーダーになるということは、数多の人々の、それも大抵の場合顔も名前も知らない人々の感情と向き合う義務が生じるということだ。全く並大抵の凡人では、太刀打ちできない。彼の知識を引用することが私たちにできる最善の策の一つであると、私は考える。著書において、

彼はあっさりと愛情と畏怖の利便性を比較してしまう。運命を女性に例え、向き合い方を例示する。彼をニヒリストだとか差別主義者などとみなしてしまうのはあなた方の自由である。しかし、彼の知は国境や時代を超えて保存されてきた。彼のように生きろとは言わない。彼のような考え方、生き方があるのだということにぜひ触れてみてほしい。そうしたい者のために、図書館という知の外部装置は存在するのだから。

さて、本学の図書館組織は来年度から再編される。現在、北里柴三郎先生の銅像が見つめる目と鼻の先にて、新しい中央図書館が建設中だ。これに伴い、図書組織の中心は現在の教養図書館から中央図書館へと移ることとなる。貧弱な知識でレポート課題に立ち向かうために、私は教養図書館の地下室に向かったことをよく覚えている。私の友人は地下のブースをよく好んでいた。自分の殻にあえて籠りたがる彼女にとって、この空間が居心地良かったらしい。また他の友人は資料を読み込んだ後、芸術のあり方について談話室で意見を戦わせていた。いずれにせよ、私や友人たちに外部装置として知識を与え、次のステージへのエネルギーを与える場所であった。若者にとってかけがえのない時間が流れた教養図書館。新しい図書館も、大勢の学生にとってかけがえのない場所になることを心から願う。

(獣医学部獣医学科2年)

文中の図書は教養図書分館で所蔵しています。
・君主論 新版 / ニッコロ・マキャヴェッリ著
請求記号 311||Ma16 配架場所：文庫本(2F)

お知らせ

●図書館スケジュール (2025年4月～2025年7月)

4月9日(水)～7月末日(前期試験終了まで)

平日9時～19時 第1・3・5土曜9時～13時

休館日 日曜日、祝日、第2・4土曜日、本学記念日

※その他、臨時閉館・開館時間の変更はその都度ホームページ等でお知らせします。

教養図書館は解体されるのか？

手塚 甫

教養図書館が無くなり、その建物は解体されるらしいという話を耳にした時、驚きと共に頭に浮かんだのは、時代の流れとはいえ、一体誰がそんなことを思いついたのだろうかということだった。

ここに、北里大学が創立されて間もない1970年に北里の教養図書館に就職した人の手記がある。

「広大な土地に大学病院を建設中で…広いキャンパスにあるのは一般教育棟、体育館、女子寮のみ、西側を望めば丹沢の山並み…都心の大学からは想像できない淋しさでした」とある。

なにも無い所から始める事業の厳しさをよく窺い知ることが出来ると共に、一般教育が「北里」では制度上の単なる添え物ではなく、一個の独立した存在と考えられていたことに目が行った。

教養図書館はこの一般教育棟の二階の一室の所謂図書室としてスタートした。それが教養図書館として一個の独立した建物を持つことになったのは、昭和が終り年号が平成と改まった1989年であった。当時、大学の大綱化の名の下で時代の要求に直に応じられるように専門教科により多くの時間を当てようとする考え方が支配的になろうとしていた。この空気の中で、北里は教養図書館のために独立した建物を建設することにしたのである。

これは大学指導部が計画したことで、教養部の方から要求した訳ではない。だから教養部側はこの計画を聞いて驚くと共に、学校の期待に応えようという気持ちも高まった。しかも、学

校側でこの計画を担当する松浦学長は、当時教養図書館長の任にあった私に「財政上限りはあるが、少しでもいい物を作りたいから現場の声を遠慮なく聞かせてほしい」と言われてもいたので、建設を請け負った鹿島建設で設計を担当した森さんに、我々が話し合っ出てきた希望を、その都度伝えた。教養図書館はこのような経緯を経て出来たものである。

私は、大学で歴史学を担当していた関係で、北里研究所が所蔵する文書の解説を依頼されたことが機縁となって、北里柴三郎先生の生き方を知る機会が増えた。そして、北里先生の、時流に抗してでも目指す目的に向かおうとする強い意志、そして、自分が支え、支えられた人々との縁をどれほど大事に考えたか、その絆の強さを知り、先生への畏敬の念を深め、それを学生にも語ってきた。北里先生が伝研所長を辞し北里研究所を立ち上げた経緯にもそれがよく表われている。

教養図書館は、北里先生が白金の地を選んで建てた北里研究所本館を模したものであることは、北里研究所設立の経緯を知る者ならきっと気付くはずである。そしてその北里研究所本館はコッホ研究所を模したものであることにも考えが及ぶはずである。

時代は今、激しく動いている。北里もその動きに遅れまいと、新学部を作り、新校舎建設の真っ最中である。そういう時だからこそ、自分の足許を見つめることが大事なのではないだろうか。「北里」は、これまで築き上げてきた、他に誇れる立派な伝統があるのだから。

(元教養図書館館長・歴史学)

教養図書館は未来へ続く

松 野 めぐみ

私は1990年に北里大学へ事務職として入職し、教養図書館へ配属となりました。その後2024年3月に退職するまで、学内の図書館への人事異動を経て20年もの間、教養図書館での勤務は続くこととなりました。

教養図書館に初めて足を踏み入れた時、特徴的かつ美しい建物であることに感動を覚えました。外観だけでなく、内部の設備までも学祖北里柴三郎先生が創立された北里研究所をイメージして造られていると聞き、図書館コンセプトを検討した方々から学生、研究者へ北里精神を継承して欲しいという強い思いに心を打たれました。近年、相模原キャンパス内では学部棟建替工事が次々と行われており、建物全体から柴三郎先生を感じ取ることのできる施設は、いまや教養図書館だけだと思っています。

1989年の開館にあたって学内の図書館として初めて、メインカウンターを出入口に面して置かず、学生が職員を目を気にせず入退館しやすい導線を配し、自由に歓談でき飲食も可能な談話室を設置したと知り、当時としては非常に先進的な運営に驚きました。当初から「行きたくなる図書館」、居心地のよいサードプレイスを目指した訳です。当時の先輩職員からお聞きしたのですが、先の配置に対して学内から学生の利用マナーを不安視して反対する声があったそうですが、館長と図書館職員で検討を重ねて運用を始め、その後に繋げたことを知りました。いまとなっては、館内の限定箇所での飲食できることは当たり前ですが、1990年代は歓談、飲食不可とするのが図書館の常識でし

た。その当時の教養図書館職員から利用者を信頼する姿勢、図書館の独自性を学んだものでした。

また、入学から月日が経つにつれて、新入生が慣れない学生生活、友人関係などを図書館職員に打ち明けに来ていたことも印象的でした。元来、図書館員は利用者の声を聴くことに長けているものです。不安な気持ちを持った学生を時に紅茶とお菓子でもてなしながら話を聞き（古き良き時代ですね）、笑顔になっていく彼らを目にしてきました。接するにあたっては図書館職員の立場としてでしたが、さながらミニ学生相談室のようでした。いまの教養図書館にも、学生の居場所作りの姿勢は受け継がれていると思います。

大学の教養教育のあり方は、平成、令和に掛けて様々に変化していますが、教養図書館は一貫してその大切さを旧教養部時代から一般教育部へかけて共に守り続けてきました。それらは蔵書構成、図書委員の姿勢からも見て取れると思います。

2025年には相模原キャンパスに新しい図書館が開館予定とお聞きし、大変楽しみに待たれるところです。教養図書館の精神は、新館の施設、蔵書、図書委員、図書館職員を通じて継承されてゆくことだと思います。そして、今後も学生は図書館を通して教養教育を身につけることでしょう。その道は長く、途切れることなく続いてゆきます。

新しい北里大学図書館に大いに期待しております。

（元教養図書館実務責任者）

教養図書館を2024年3月31日でご退職された松野 めぐみさんより、本エッセイを特別にご寄稿いただきました。長年の教養図書館におけるご尽力とご貢献に、心より感謝申し上げます。

閲覧ニュース136号 2025.4発行
北里大学図書館（教養図書分館）
〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1
電話（042）778-8005

発行責任者 平井 清子
編集委員 赤澤とし子 猪原 敬介
川上 言美 増本 三香
森景 真紀 安川 智子
米山 泰祐 （五十音順）